

「第三の場所」とネットワークのコンフリクト

——大阪・カフェcommonsの事例——

大阪国際大学 渡邊太

1 目的

本報告では、非公式な社交の場が社会運動の拠点として、他の社会運動とネットワークを形成することと、それによって生じるコンフリクトについて、大阪府高槻市の「commons大学」の事例をもとに検討する。R. オルデンバーグは、家庭（第一の場所）とも職場（第二の場所）とも異なる、カフェやバル等の社交の場をインフォーマルでパブリックな「第三の場所」として捉え、社会的信頼の構築や民主主義の鍛錬の場として重要であることを指摘した。私たちはさらに、「第三の場所」を既存の制度や文化を問い直す密談や共謀のコミュニケーションが横行する場と位置付け、社会運動の拠点となる可能性に着目する。運動の拠点としての「第三の場所」は他の拠点とネットワークを形成するが、その際に発生する運動の高揚とコンフリクトについて考察する。

2 方法

大阪府高槻市のカフェcommonsを事例として、複数の「第三の場所」の間に形成されるネットワークが社会運動の生成と展開に及ぼす影響について考察する。カフェcommonsは、2005年に、「ひきこもり支援」にかかわるNPO法人が運営するカフェとして開店。運営方式を模索するなかで、2009年から毎週金曜日の夜に集まり、カンパ制で食事をしながら雑談に終始する「commons大学」が始まる（私も事務局として関わる）。「commons大学」を続けるなかで、様々な社会運動・市民運動の参加者との交流が実現した。その過程で生じた運動の高揚とコンフリクトの事例について、主として参与観察によって得られたデータをもとに考察する。

3 結果

同じ場所で同じことをする活動を7年も続けていれば様々な個人や団体と出会う。カフェcommons自体がそもそも社会運動を志向した場だったので、社会運動や市民運動に関わるネットワークが自ずと形成される。とりわけ近年は、路上で鍋を囲む「国境なきナベ団」や、大阪の中津を拠点とするアナキスト的な社会運動との接点が強まる一方で、地元である高槻市で実験的に「子ども食堂」を試みる個人や団体との協働にも取り組んできた。人が集まる場所を作る実践はそれ自体が社会運動である。複数の「第三の場所」とネットワークを形成しつつ協働を試みるなかで、それぞれの場所での活動のタイミングを連動させることの意義が認識された。その一方で、場所ごとに持たれる運動のノリやスタイルの差異がときに深刻なコンフリクトを生むことも経験した。

4 結論

単独の「第三の場所」としての「commons大学」は一時的に運動として高揚した時期もあったが、近年自主的な活動は停滞し、人が集まる場所を維持することに汲々としている。それでも数年間の活動の中で出会いは無数にあり、複数の「第三の場所」の間で活動に巻き込んだり巻き込まれたりする関係性が発生する。ネットワークの形成は社会運動の高揚につながることもあるし、抜き差しならない深刻な対立や騒動が生じ去っていく人もいる。それでもなお細々とでも続けていくことが社会運動の持続可能性として重要である。運動のなかでの議論を抑圧しないと共に、ローカルな人間関係に発するコンフリクトを深刻な対立に至らせない知恵と実践の必要性をあらためて実感する。